

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第十三主日C年

小西広志

2022年6月26日

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは、教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年6月26日、年間第十三主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの観点から読んで味わってみましょう。

外套

エリヤ以前の預言者、例えばモーセやサムエルは神の言葉を預かりながらも、同時に民の指導者でもありました。しかし、エリヤは政治的な働きはせずに、純粹に神の言葉を語る預言者でした。また、エリヤの頃には数多くの預言者と称する人々がいたと言われていました。彼らは王さまのお抱え預言者として、王さまに気に入るような言葉を主なる神の言葉として語っていました。こういったいわば、職業的預言者とは異なり、エリヤは王さまが仮に間違ったことをしていたら、批判することもためらわない真の預言者だったのです。

今日の第一朗読の背景にはエリヤとイゼベルとの対決があります。お抱えの預言者たち450人が殺されてもなお、イゼベルはひるむことなく、エリヤに迫ってきます。自分の働きが実らなかった現実に直面して、落胆したエリヤはホレブへと向かって旅に出ます。そこで主なる神の顕現に触れたのです。そこで、「静かにささやく声」(19章12節)をエリヤは耳にします。その声は三つのことをエリヤに要求しました。1. 再び、荒れ野を通過して帰り、ダマスコでバザエルに油を注いでアラムの王にすること。2. ニシムの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とすること。3. アベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注いで後継者とすることの三つでした(15-16節)。結局、エリヤはエリシャに油を注いだけでした。

今日の第一朗読はエリヤとエリシャの出会いの場面です。

エリヤはエリシャに何も語りません。ただ19節にあるように、自分の外套(アダレット)を掛けた(シャラハ)だけです。フランシスコ会訳では「エリヤはそばに行き、自分のマントをエリシャに投げかけた」となっています。

ホレブでのエリヤへの主なる神さまの現れ(8-14節)は、シナイ山でのモーセへの主なる神さまの現れ(出

33章18-23節、34章4-7節)と似ています。ホレブとシナイ山は同じ山の二つの名前です。エリヤは四十日四十夜歩いてホレブに到着します(王上19章8節)、これは、モーセが主なる神と四十日四十夜一緒にいたことを思い起こさせます(出34章28節)。ユダヤ教の伝承ではエリヤが身を隠した洞穴(王上19章9、13節)は、主なる神が通り過ぎる時にモーセが身を寄せた岩の裂け目(出33章22節)と同じだと教えているそうです。そして、「わたしの手でお前を覆う。わたしが手をのけると、お前はわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見られない」(22-23節 フランシスコ会訳)と主なる神さまが言われたことが、エリヤの場合には「エリヤはそれを聞くとマントで顔を覆い、外に出て洞穴の入り口に立った」(王上19章13節 フランシスコ会訳)となります。

つまり、外套(アダレット)はエリヤにとって主なる神さまとの親しい交わりを交わした時のしるしとなるのです。その外套(アダレット)をエリヤに投げかけたのは、今度はエリヤ自身が神さまとの親しい交わりを生きることを表しているのです。

エルサレムに向かう

福音朗読の冒頭には「エルサレムに向かう決意を固められた」(51節)とあります。イエスさまとその一行が旅の始まりの場面です。57節の「と言う人がいた」に注目してください。ここから三人の人物が登場します。「どこへでも従って参ります」(57節)、「父を葬りに行かせてください」(59節)、「家族にいとまごいに行かせてください」(61節)。どの人もイエスさまに従う意志がない人ではありません。弟子として不都合ではない人たちです。しかし、イエスさまは従い方を教えます。57節の「と言う人がいた」の「人」とは原文では不定代名詞「ある者」です。イエスさまの後に従って歩んでいる人は十二人の弟子たちだけではなく、たくさんの人々がイエスさまに従っていたのです。

一番目の人にイエスさまは「人の子には枕する所もない」(58節)と言われます。「人の子」とは、イエスさまがご自分のことを語る時に使う表現です。狐にも空の鳥にも暖かく過ごすことができる巣、すなわち家庭がある。しかし、イエスさまにはそれがありません。52節の「準備しよう」とはヘトイマゾーとギリシア語で言いますが、これは食卓を準備する、宿泊を準備するの意味です。サマリア人の村の人々は、イエスさま一行が宿泊するのを拒絶したのです。イエスさまが拒絶されるなら、イエスさまに従っている弟子たちも拒絶されるのです。

イエスさまの後に従っている二番目の人にイエスさまは「わたしに従いなさい」(59節)と命じます。すでに従っているのに、あえて「従いなさい」と言われるわけですから、この命令には特別な意味があります。60節の「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい」は厳しい命令となります。ユダヤ人にとって親に対する孝行は絶対的なものでした。イエスさまはそれを無視します。「死んでいる者たち」とは亡くなった人の家族や親族を指すのでしょうか。彼らはイエスさまから見るとご自分に従わない者たちです。つまり、イエスさまから切り離された生ける屍と同様の人々です。「死人たちを葬らせよ」の「死人たち」とは実際に死んだ者たちのことを指します。イエスさまに従うとは「神の国を言い広め」(60節)ることとつながるのです。ですから、イエスさまを通じて神の国のメッセージに触れ、それに結ばれているのちを得た人は、そのいのちを宣べ伝えることに専念しなければなりません。

三番目の人が第一朗読と関連するかもしれません。エリシャはエリヤにお願いして「家族にいとまごい」(61節)を願い、許されました。しかし、イエスさまに従うのはもっと厳しいのです。イエスさまは家族へのいとまごいを認めません。イエスさまに従うとはすべてに優先されるものだからです。畑を耕す鋤(すき)を使う人は顔をまっすぐ前に向けていないと、畑の畝(うね)が曲がってしまいます。同じように、顔をエルサレムに向けたイエスさまだけに目を向けて歩まなければならないのです。

まとめ

エリヤは神さまとの出会いを示すしるしとして「外套」をエリシャに投げました。しかし、イエスさまに出会った人にはしるしは必要ありません。なぜなら、イエスさまご自身が神の現れだからです。だからこそ、イエスさまに「従います」と決心した人は、「今」、この時に従っていかなければならないのです。ちょっと待ってください。許されないわけです。まして父親を葬ったり、家族といとまごいするという自分の都合で行動してはならないのです。ただ、ただ、「今」、イエスさまに従っていくのです。

しかし、その「今」とはプチプチと切り取られた「今」ではありません。イエスさまは顔をエルサレムに向けて歩み始めるのですから、向かう途上にある「今」です。

キリスト信者は向かう途上にある存在です。教会もまた向かう途上にあります。そして人類とすべての被造物もまた向かう途上にあります。この道のりの中で「今」、つまりその都度、その都度、イエスさまに従っていこうと決断します。たとえ、誤りを犯しても、罪を犯しても、その都度、新たにイエスさまに従っていこうと決断するところに人間のすばらしさ、教会のすばらしさ、人類のすばらしさがあるのです。

それではまた来週。